砂田遺跡

――長野県塩尻市一本木土地区画整理事業
発掘調査報告書――

1987

塩尻市教育委員会

砂　田　遺　跡

——長野県塩尻市一本木土地区画整理事業
発　掘　調　査　報　告　書——

1987

塩尻市教育委員会

序

砂田遺跡は現在の塩尻中学校の敷地を中心として広がり、すでに昭和初年に弥生時代の石包丁の出土が知られており、市内でも比較的早い時期から注目されてきた遺跡であります。また昨年度は塩尻東地区県営ほ場整備事業に関連する緊急発掘調査が行われ、縄文中期、弥生、中世の複合遺跡であることが明らかになっています。この度、市都市計画課所管の一本木地区土地区画整理事業がこの地域に入り、遺跡の一部が破壊されることになったため、埋蔵文化財保護の立場から工事に先立ち発掘調査を行い記録保存として残すことになりました。

発掘調査は市文化財調査委員長中島章二先生を団長に、調査員には長野県考古学会員の諸氏にお願いし、初冬の寒さも厳しい11月下旬から12月初旬にかけて行われました。調査の結果、これまで弥生時代の遺跡とされながらも遺物のみの出土であった本遺跡から住居址が検出され集落跡であることを確認したほか、縄文から近世に至るまで継起的にこの地で生活が営まれたことを示唆する遺物が多く出土し、当地域の歴史的解明に大きな前進をもたらす貴重な資料を提供することになりました。

本調査を実施するにあたり、関係役員の方々ならびに地元の皆さんには大変お世話になり厚く御礼申し上げます。また調査と整理に携われた調査員の先生方をはじめとして多くの方々の御努力に対し、重ねて謝意を表するものであります。

昭和62年2月

塩尻市教育委員会

教育長　小　松　優　一

例　　言

1．本書は塩尻市大字塩尻町における、一本木土地区画整理事業に伴う砂田遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、砂田遺跡発掘調査団（団長　中島章二氏）に委託し、現場での調査は昭和61年11月21日から12月５日まで行った。

3．遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和61年12月から昭和62年３月にかけて行った。その過程では次の方々の協力を得た。記して感謝申し上げたい。分担は次のとおり。

遺構…整理、トレース；鳥羽。

遺物…実測、拓本、トレース；龍野。

図版組み…鳥羽、龍野。

写真…鳥羽。

4．本書の執筆は各調査員、調査補助員が分担して行い、文責は文末に記した。

5．本書の編集は鳥羽が行った。

6．中･近世の遺物については宇賀神誠司、市川隆之各氏の御指導を得た。銘記して感謝申し上げたい。

7．調査にあたり、一本木土地区画整理準備委員会代表笠原洋司氏ならびに委員の各氏、また株式会社「塩尻工業」の御理解、御援助をいただいたことを明記、お礼としたい。

8．本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目　　次

序
例　　言
第Ⅰ章　調査状況 …… 1
第1節　発掘調査に至る経過 …… 1
第2節　調査体制 …… 1
第3節　調査日誌 …… 2
第4節　遺跡の状況と面積 …… 3
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境 …… 4
第1節　自然環境 …… 4
第2節　周辺遺跡 …… 4
第Ⅲ章　遺跡の概要 …… 7
第1節　遺跡の概要 …… 7
第2節　発掘区の設定 …… 7
第Ⅳ章　遺　構 …… 10
第1節　住居址 …… 10
第2節　小竪穴 …… 14
第Ⅴ章　遺　物 …… 18
第1節　土　器 …… 18
第2節　石　器 …… 22
第Ⅵ章　まとめ …… 23

第Ⅰ章　調査状況

第1節　発掘調査に至る経過

昭和59年11月22日　市都市計画課より市教委へ塩尻市一本木土地区画整理事業の予定地区内に埋蔵文化財包蔵地砂田遺跡がかかるとして保護協議が提出される。

昭和59年11月28日　市教委の小林、鳥羽は市都市計画課中野の案内のもとに現地に赴き、調査したところ、これまで遺跡の範囲内とされていた地域に工事がはいることを確認し、工事施工担当課である市都市計画課に工事に先立つ緊急発掘調査の必要を申し入れ、同課の申し入れにより市教委は調査の依頼を受ける。

昭和60年8月19日～9月2日　西側に隣接する地区において塩尻東地区県営圃場整備事業に関連する同遺跡の緊急発掘調査が実施され、中世建物址が検出されたほか、縄文、弥生、中世の遺物が出土する。

昭和61年6月3日　県文化課、市都市計画課、市教委、地元関係者により現地説明があり、調査日程、調査箇所を協議する。

昭和61年11月13日　塩尻市は市教委に発掘調査を委託し、市教委は砂田遺跡発掘調査団（団長中島章二氏）に調査を再委託する。

第2節　調査体制

団　　長　中島　章二（市文化財調査委員長）

担 当 者　鳥羽　嘉彦（長野県考古学会員、市教委）

調 査 員　小林　康男（日本考古学協会員、市教委）

　　伊東　直登（長野県考古学会員、市教委）

　　市川二三夫（長野県考古学会員）

調査補助員　龍野　守

参 加 者　伊沢みきゑ、小沢甲子郎、小沢博光、斉藤晴敬、佐倉元一郎、清水年男、清水国弘、高橋鳥億、高橋阿や子、田中良三、中込　孝、中村　啓、西窪芳雄、保高愛子、松下おもと、柳沢　一、吉野宗治、吉江貫逸、吉江さかえ、米窪さだゑ。

事 務 局　塩尻市教育長　　小松優一

　　市教委総合文化センター所長　　二木三郎

　　〃　文化教養担当課長　　清水良次

〃　文化教養担当次長　　原田　博
〃　文化教養担当副主幹　　小林康男
〃　文化教養担当主事　　伊東直登
〃　文化教養担当主事　　鳥羽嘉彦

協　力　者　塩尻市一本木土地区画整理準備委員会代表・地権者　　笠原洋司
塩尻市一本木土地区画整理準備委員　　笠原良一
地権者　　㈱　塩尻工業

第3節　調査日誌

昭和61年11月21日（金）快晴　バックホーによる表土除去。東側では僅かに遺物が出土したが、西側では皆無。ローム層直上で終了したが、中央付近および東南域で黒色落ち込み帯が認められた。

11月26日（水）晴　本日から本格的作業開始。参加者の受付終了後、担当者より遺跡の概要および日程説明。器材整理後、調査区東端より助簾による検出作業開始。5mグリッド南北A～E、東西1～12を設定。風が強く寒い一日だった。

11月27日（木）晴　昨日に引き続き検出作業。中央やや東寄りよりカマドと思われる礫群を伴った落ち込みを検出。付近より数基の小竪穴を確認。縄文時代、中・近世土器片、砥石、古銭出土。市都市計画課来訪。

11月28日（金）晴　東南域の黒色落ち込み帯に幅60cmのトレンチを南北に3本設定し、掘り下げる。中央南側の三角形の水田下に住居址と思われる落ち込みを確認。精査を行ったところ検出面付近より焼土を検出。市都市計画課、塩尻工業来訪。

11月29日（土）曇のち一時吹雪　礫群を伴う落ち込みは掘り下げたところ遺構と断定できず、断念する。代わりにすぐ南側の黒色落ち込みより弥生時代の埋甕炉が出土し、第1号住居址とする。また昨日検出された落ち込みを第2号住居址とし、掘り下げを行う。

11月30日（日）定休日。

12月1日（月）第1号住居址完掘。埋甕炉の半截、セクション図測図。埋甕炉を取り上げ、住居址の平面図測図。第2号住居址セクション図化、遺物取上げ。小竪穴群掘下げ。

12月2日（火）晴　第2号住居址床面精査、平面図測図。東区北側に東西に走る溝をベルトを残し掘り下げる。小竪穴群掘下げ。調査区西端の黒色落ち込み帯に東西方向のトレンチを6本入れる。

12月3日（水）晴　小竪穴、ピット群平面図測図。第1号住居址南側の黒色落ち込み帯より弥生の埋甕炉出土。第3号住居址とする。西端黒色帯の掘下げ続き。

12月4日（木）曇一時雨　第3号住居址平面図測図。埋甕炉半截、セクション図測図。第3号住居址西側の畔下より住居址が一部、確認され第4号住居址とする。掘下げ、平面図測図。西側の小竪穴実測。調査地区全体図の測図。

12月5日（金）晴　第4号住居址写真撮り。調査区全域の写真撮り。テント取り壊し。器材片付け、撤収。本日をもって現場における作業を終了する。

整理作業は12～3月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、注記、復元作業と同時に実測図の整理、製図、遺物の実測、図版作成。また、報告書の原稿執筆を行う。

第4節　遺跡の状況と面積

遺跡名	場　所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
砂　田	塩尻市大字塩尻町 366－1,367番地	水田	包蔵地	15,000㎡	6,000㎡	200㎡	1,250㎡	1,300,000円

第1表　発掘調査経過表

遺跡名＼月	11	12	1・2	主な遺構	主な遺物
砂　田	発掘	遺物整理 図面作成 原稿執筆		弥生時代住居址　4 小竪穴　23	縄文後期土器、石器 弥生土器、石器 土師器、須恵器、灰釉陶器 中・近世陶器、古銭

（事務局）

第II章　遺跡周辺の環境

第1節　自然環境

塩尻東地区は松本平の南東端に位置し、国鉄中央東線と国道20号線が中央を東西に貫通している。

地形的にみると東側からは高ボッチ山塊の西麓斜面が、また南側からは善知鳥峠、大芝山に代表される中央アルプス北端の山麓斜面が迫っており、中央を東山に源を発し、塩尻市街地へ流下する田川によって形成された扇状地形が発達している。扇状地は長さ4.5km、幅2kmの広大な規模を持ち、その扇端は下西条西福寺の付近から棧敷、入道部落に至る狭長な低窪地を挟んで桔梗ケ原台地に連なっている。田川はここで権現沢川、四沢川、矢沢川などを集めながら下西条の北側で向きを北へ変え、松本平の東側を一直線に北流し奈良井川に合流している。

砂田遺跡は、堀ノ内、下西条、町区の3区にまたがり、現在の塩尻中学校敷地を中心として展開している。ここは東山から西流してきた田川が右曲する位置にあたり、内側に軽微な段丘を認めることができる。遺跡は段丘上にあるため現田川河床とは若干比高差があり、そのために田川本流の影響を直接被った痕跡はみられないが、地形的に高所から網状に流れ込む表流水が多いため表土下の砂礫層の分布が顕しく、「砂田」といわれる所以である。

調査地区は「塩尻工業」の南側に面した東西2枚の水田であり、標高725m、約250m隔てた田川河床との比高差12mの南西向き緩斜面である。なお昨年度、塩尻東地区県営ほ場整備事業関連で行われた同遺跡の発掘調査箇所は、今回の調査箇所とは道路一つ隔てた西側の隣接地にあたり、より田川に近い側ということになる。

（鳥羽　嘉彦）

第2節　周辺遺跡

今回発掘調査が実施された砂田遺跡の所在する塩尻東地区は筑摩山地山麓にあり、その裾を切るように田川が貫流している。付近一帯は松本平でも遺跡の稠密な地域の1つであり、先土器時代から中世にかけて数多くの遺跡が残されている。以下、時代を追って遺跡の在り方を概観していきたい。

先土器時代　昭和59年に発掘した青木沢で、ナイフ型石器、尖頭器、石刃、神子柴型石斧の出土があり、鞠ノ神では尖頭器、柿沢では神子柴型尖頭器、掻器、石刃が出土している。塩尻峠中腹にはかなり濃厚に該期遺跡の分布が認められる。

縄文時代　早期では、八窪で押型文期の住居址が、向陽台で住居址、集石炉が、福沢で集石がそれぞれ発見されている。また堂の前では早期後半の住居址が発見されている。前期は田川端で住居址が、宗張で集石が発見されている。中期にはここでも遺跡が急増し、大規模な遺跡も発見されている。柿沢東、焼町、峯畑、中島、堂の前、御堂垣外などで住居址が発見されている。後

1 砂田遺跡　2 向陽台遺跡　3 堂の前遺跡　4 福沢遺跡　5 中挟遺跡　6 中島遺跡
7 柴宮遺跡　8 狐塚古墳　9 焼町遺跡　10田川端遺跡　11銭宮古墳　12久野井遺跡

第1図　遺跡位置図

期にはいると4軒の敷石住居が発見された御堂垣外が知られ、他に柿沢、ちんじゅなどで遺物が採集されている。晩期では、青木沢、堂の前、福沢、館、ちんじゅで遺物の出土がみられるが、遺構の発見はなく、遺物の量も少ない。

弥生時代、初期の遺物が福沢、ちんじゅ、銭宮、砂田で出土している。中期の遺跡は少ないが後期に下ると下西条を中心として幾つかの遺跡が分布している。田川端では40軒の住居址が発見され、該期の集落の在り方を考える貴重な資料である。また、今回の砂田では4軒の住居址が発見された。他に久野井、西福寺前、大門3番町、銅鐸を出土した柴宮があり、東山の青木沢でも土器が出土している。これらの遺跡はいずれも田川流域にあり、田川が該期の人間活動に多大な影響を及ぼしたことが推察される。

古墳時代　柿沢禰ノ神、上西条記常塚、狐塚、下西条銭宮など山麓部に古墳が築造され、久野井、中挟では住居址が発見されている。古墳の数に比較し、その背景となった集落址の発見が少なく、今後の課題といえる。

奈良、平安時代、奈良時代の遺跡は殆ど見当たらない。平安時代には、田川端、剣ノ宮、久野井、栃久保、堂の前、福沢、中挟、栗木沢、樋口、中島で住居址が発見されているが、集落規模は小さい。

中世　中島の館地、堂の前、砂田の建物址、剣ノ宮の墓坑など多数な遺構が発見されている。

（龍野　　守）

第Ⅲ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の概要

砂田遺跡は塩尻東地区の堀の内、下西条、町区の３区にわたり、田川に臨む河岸段丘面上に展開している。今回の調査地区は昨年度県営圃場整備事業に関連して実施された同遺跡発掘調査箇所とは道路を隔てて東接しており現在、水田に利用されている。水田２枚の1,250㎡が今回の調査対象となった。

調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居址４軒と小竪穴23基が検出された。これらの遺構は過去に行われた水田灌漑用水埋設工事等でかなり上層部が削平、攪乱されていたため、壁や遺物の保存状態は極めて悪かった。遺物としては縄文後期加曾利Ｂ式、弥生後期、平安、中世、近世の遺物が出土しており、量的には僅少であったがこの地に長期間、継起的に生活が営まれていたことを示唆するものであった。

砂田遺跡は早くから弥生時代の遺物を出土しているにもかかわらず集落の存在を確認することができず、また昨年度実施された県営圃場整備事業関連の緊急発掘調査においても中世建物址が検出されたのみで該期の遺構を確認することはできなかった。その意味から今回の集落跡の確認は貴重な成果であり、周辺の中島、柴宮、田川端遺跡を含め、田川流域における弥生時代の集落分布を考察するうえで極めて意義ある発掘であったといえよう。　（市川二三夫）

第２節　発掘区の設定

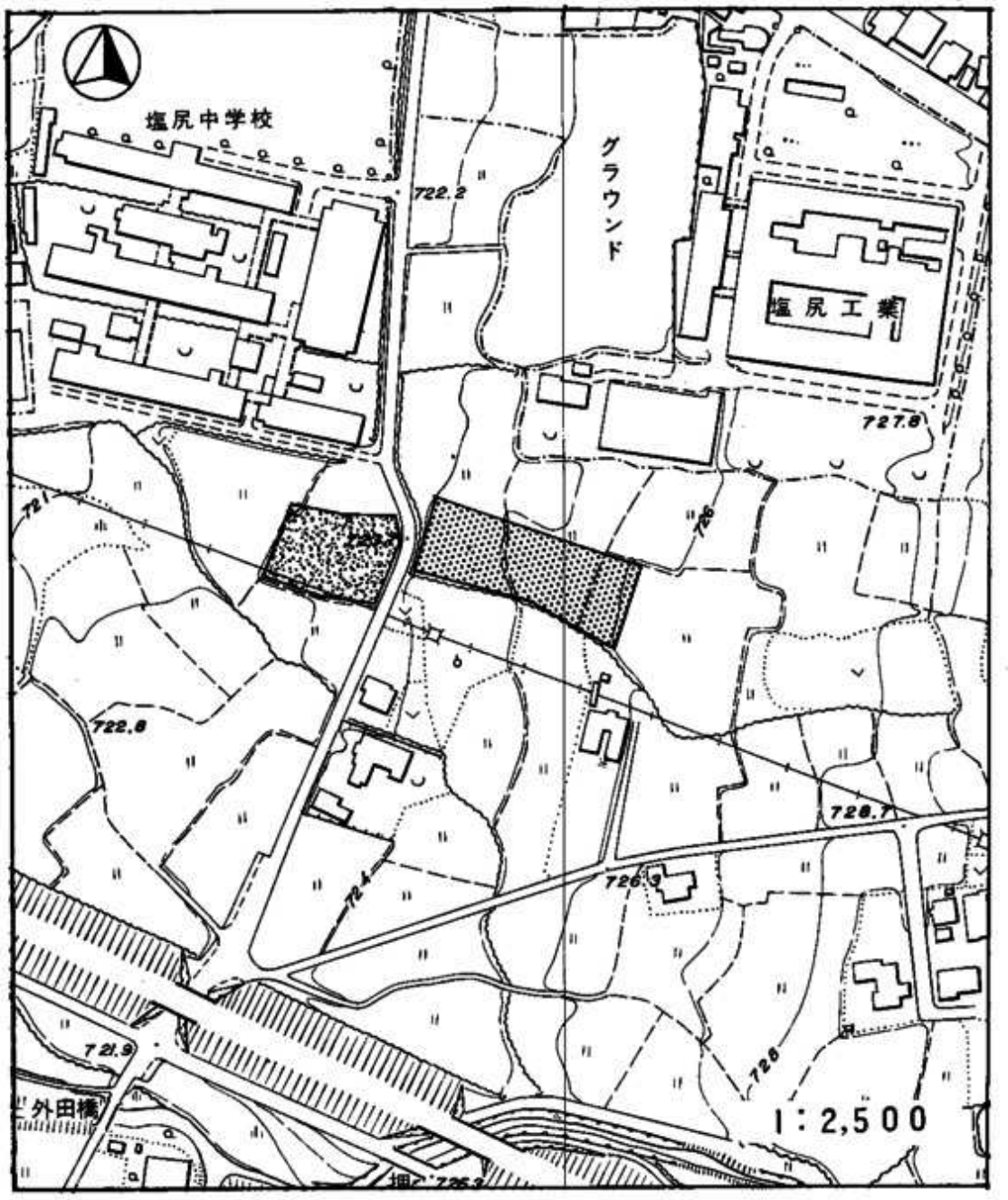
砂田遺跡は複雑な微地形上に展開しており、加えて従前の出土遺物がかなり広範囲から出土しているため、それらが流入したものであるのか、あるいは原位置のものであるのかの判断は難しく、従って遺跡の中心は今のところ絞り切れていない。今回の事業対象地区は遺跡の東端であるが標高的に最も高所にあたるため集落址の存在がかなり期待される地区であった。現在水田に利用されており、表面踏査による分布確認が不可能であったため、昨年度発掘調査が実施され、ある程度の成果が得られた西接の調査地区に最も近い箇所を選定し、今回の調査地区を設定した。

発掘調査に先立ち、表土の堆積状況を把握するとともに遺構・遺物の保存状態を確認するために数ヶ所に試掘抗を掘削した。その結果、調査区東側で約25cmの深さ、西側では約15cmの深さでローム質の水成砂礫層にあたった。東側では表土下に薄層ではあるがかなり安定した自然堆積層が残っており、特に南側では厚い黒色土の存在により、土器の出土状況からみてもある程度の遺構の可能性が伺えた。一方西側は水田造成の際と思われる削平が深く入っており、攪乱は基盤に

達し、また遺物の出土もみられなかった。

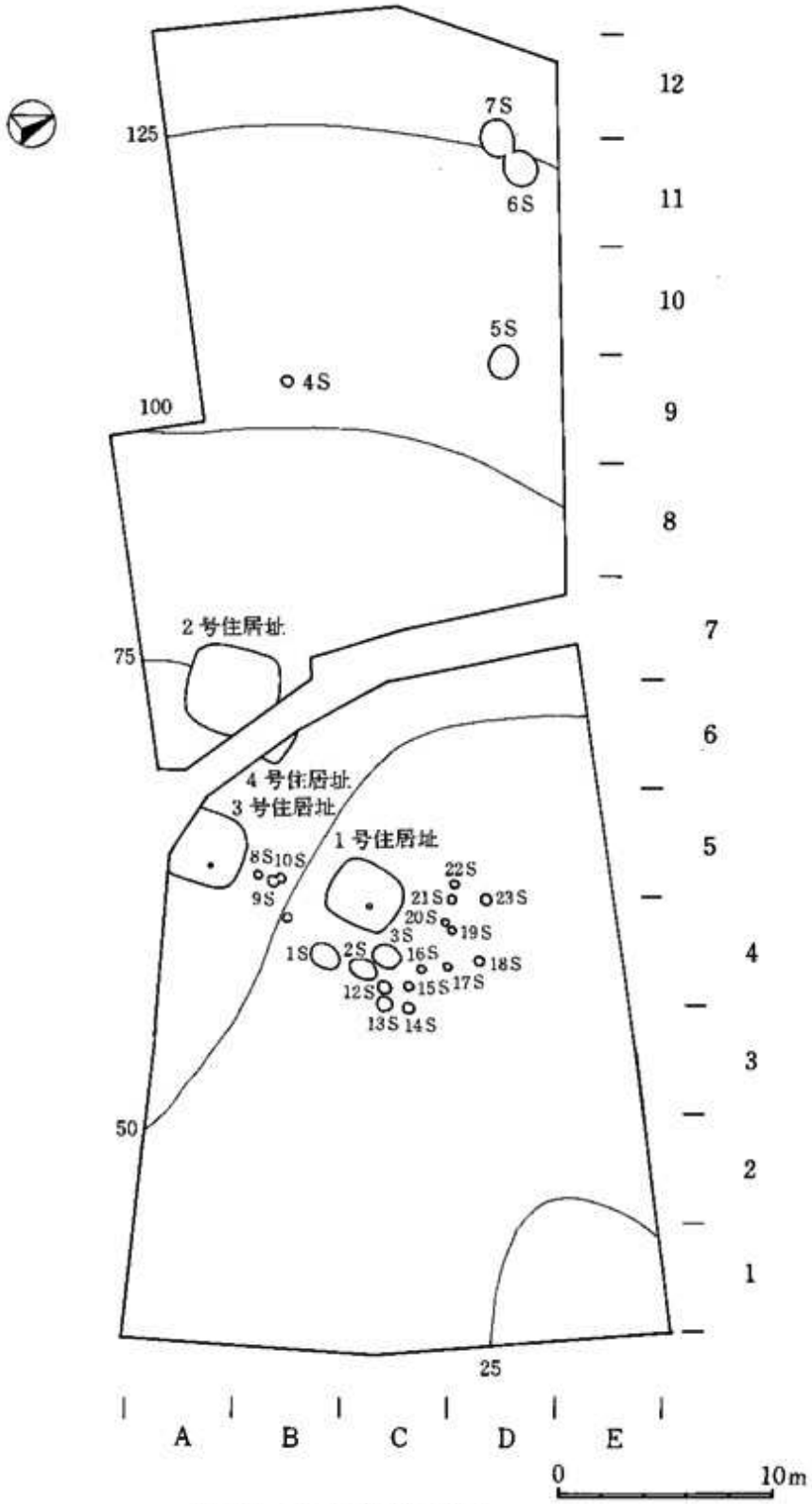
調査はバックホーによる表土除去を行ったのち、グリッドを設定した。グリッドは調査区南東端のクイを基準に南から北へA～E、東から西へ1～12のクイを設けた。発掘区総面積は1,250㎡である。

（鳥羽　嘉彦）



発掘調査域　　60年度調査域

第2図　砂田遺跡付近図



第3図　砂田遺跡遺構全体図

第Ⅳ章　遺　　構

第1節　住居址

第1号住居址

調査区中央やや東寄りにあり、B、C－4、5グリッドに位置する。遺構検出時に確認された方形を呈する黒色落ち込み域を掘り下げたところ、約8㎝で埋甕炉口縁にあたり住居址と判明した。

プランは隅丸方形でやや南西隅が張り出している。壁高から上層がかなり削平されていることが推測され、正確な規模は不明であるが現存部で南北3.24m、東西3.16mを測る。長軸方向はN20°Eを指し、この方向は他の住居址とほぼ一致している。

壁は非常に浅く、北壁8㎝、東壁10㎝、西壁5㎝、南壁12㎝を測るが、これは検出面の傾きというよりむしろ床面の傾きからくるものである。ほぼ垂直で砂礫を含まない泥質の壁である。

床は平坦でやや南東への傾斜を有する。水分が多く泥質の土であるため堅緻な面は残存せず、埋甕炉およびピット面を床面とした。ピットは6基検出され、主柱穴は4本と思われる。いずれも深さ20㎝前後を有するが、N33°Eと住居址とはやや方向を異にしている。

埋甕炉は中央やや北東寄りにあり主柱穴ラインより内側に位置する。小型甕の口縁部のみを逆位に埋設しており、遺存状態は良好である。

第2号住居址

調査区中央の畔沿いにあり、一部畔下にかかっていたためプランを完全に露呈することはできなかった。A、B－6グリッドに所在し、第4号住居址が北東側に一部重複している。

検出時、褐色土層中に明瞭な黒色方形プランが看取され、掘り下げたところ焼土および床面を確認し住居址とした。焼土はやや高いレベルにあり、また焼土が出土した北壁が最も不明瞭であったため住居址が完掘されるまでこの焼土が付随するものであるかどうか不明であったが、後に畔の反対側から第4号住居址が発見され、しかも床面が焼土と同レベルであったため焼土は第4号住居址に付随するものであることが判明した。

プランは北側の隅がやや突出する隅丸方形を呈し、南北3.80m、東西3.40mでN37°Eの長軸方向をもつ。第1号住居址と同様、耕作による削平がかなり遺構面に及んでおり、東壁と南壁こそ約7㎝の壁高を有するが、西壁2㎝、北壁4㎝を測るにすぎない。軟弱の壁面であるが覆土の色調が明瞭に異なっていたため壁の確認は容易であった。

床面は一部堅緻な箇所もみられたが概して軟弱で、砂礫混りのため凹凸が著しい。北側へ若干

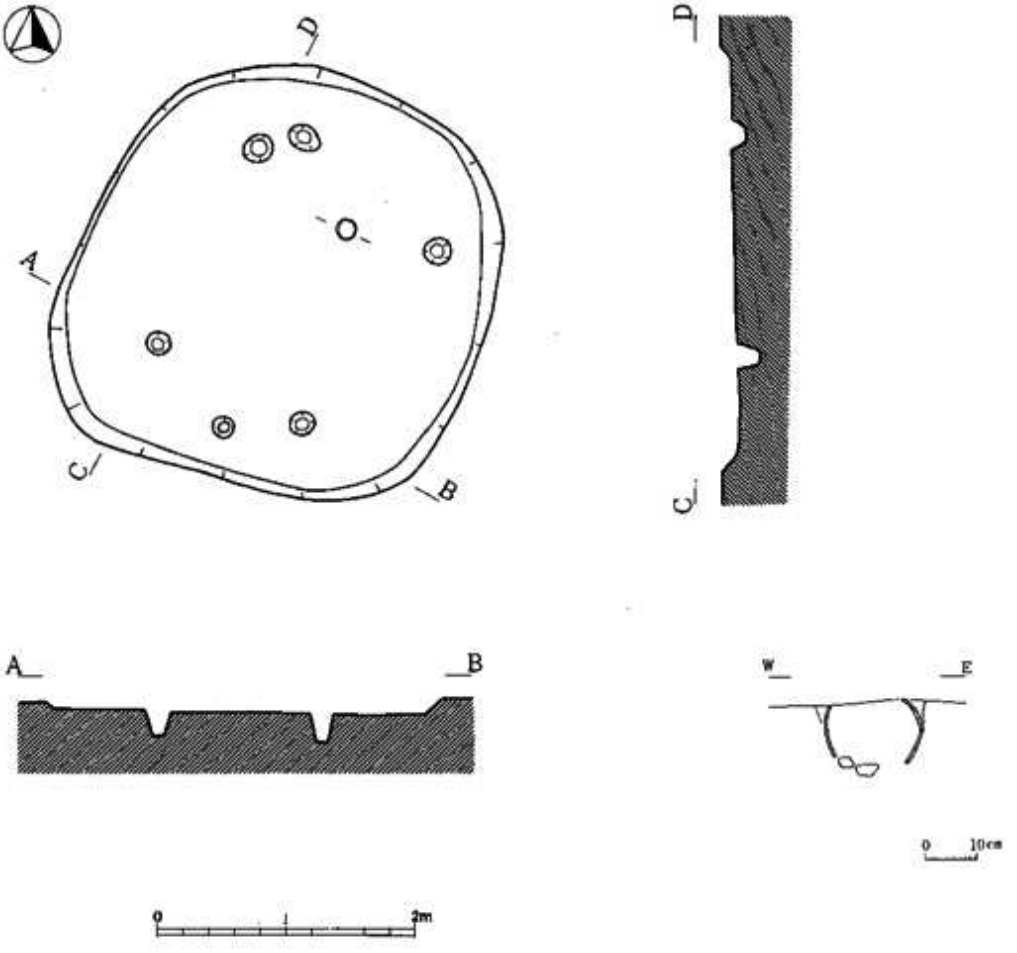
の傾斜があり床面レベルで10cmの差を有する。周溝は西壁沿いにのみみられ全周はしていない。比較的深い保存状態が良好な周溝である。ピットは床面上で4基検出されたが主柱穴を伺えるものは西壁の2基のみであった。

炉は確認されなかったが北隅に散在している礫群中に少量の焼土が混入していたことから炉の可能性が伺える。

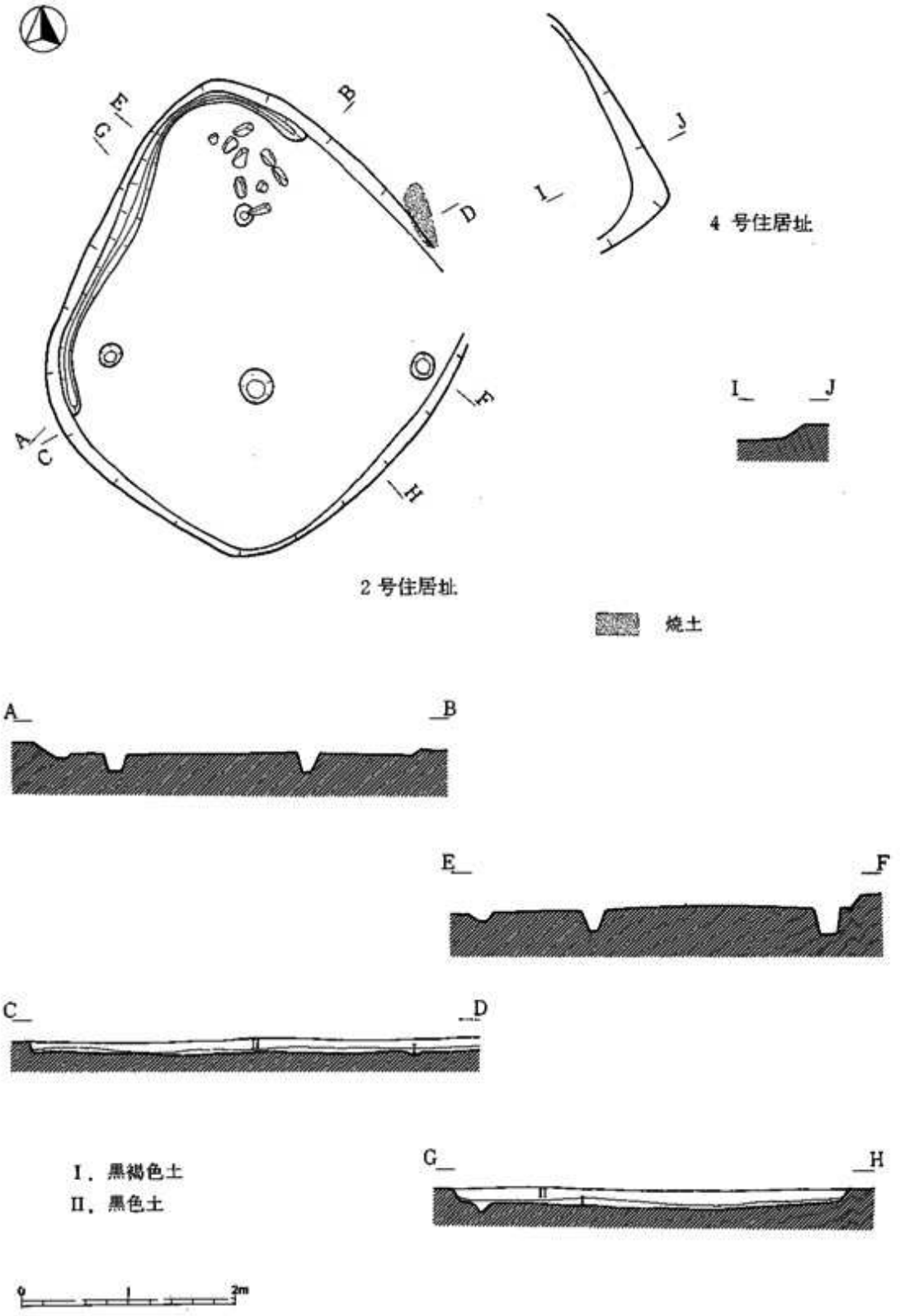
第3号住居址

調査区中央の南壁沿いに位置し、A－5グリッドに所在する。南側には黒土の堆積が厚く、削平作業に手間取ったため住居址確認も遅れた。

プランは南側が未調査区にかかり全周を確認することはできなかったが、隅丸方形を呈すると思われ、一辺3.20mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが前2者と同様、遺構面での削平が著しく壁高は低い。北壁4cm、東壁2cm、西壁7cmを測り、西壁のみ明瞭な落ち込みとなって



第4図　第1号住居址



第5図　第2、4号住居址

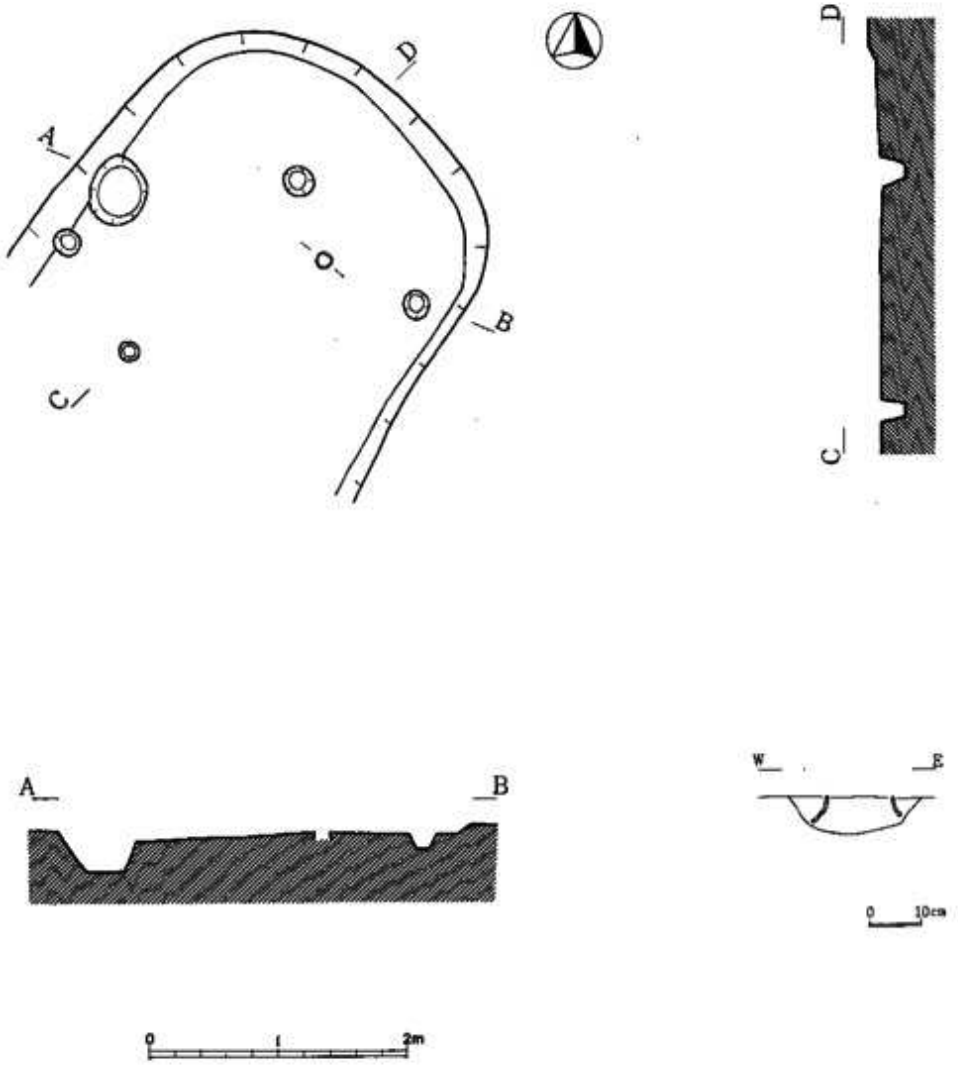
いる。

床面は凹凸が著しくやや南西方向へ傾斜している。軟弱でタタキ面は確認できなかったが、やはり他の住居址と同様に水の影響を受けたためと思われる。ピットは5基検出されたが主柱穴は不明である。周溝は検出されなかった。

炉は北側中央に埋甕炉が出土した。径13cmと小型のもので甕の口縁部のみを逆位に埋設していた。焼土は確認されなかった。

第4号住居址

調査区中央畔沿いのB－6トレンチに発見され、第2号住居址とは一部重複し、後者によって



第6図　第3号住居址

斬られている。本住居址の大部分が畔下であったため東壁を含む一部しかプランを確認することはできなかった。

隅丸方形のプランを呈し、残存壁の有り方より推して一辺2.30m前後を測るものと思われる。住居址の中では最も小形のものである。壁は残存する東壁で13cmを測り、垂直な掘り込みを有する。床も水平堅緻であり、壁と床に関しては最も保存状態が良好であった。ピット、周溝等の施設は確認できなかった。

炉は畔の反対側に所在する第2号住居址の北壁検出面に本址の焼土が検出され、地床炉と思われる。厚さ5cmを測り、きれいに焼けた不純物の少ない焼土であった。

（鳥羽　嘉彦）

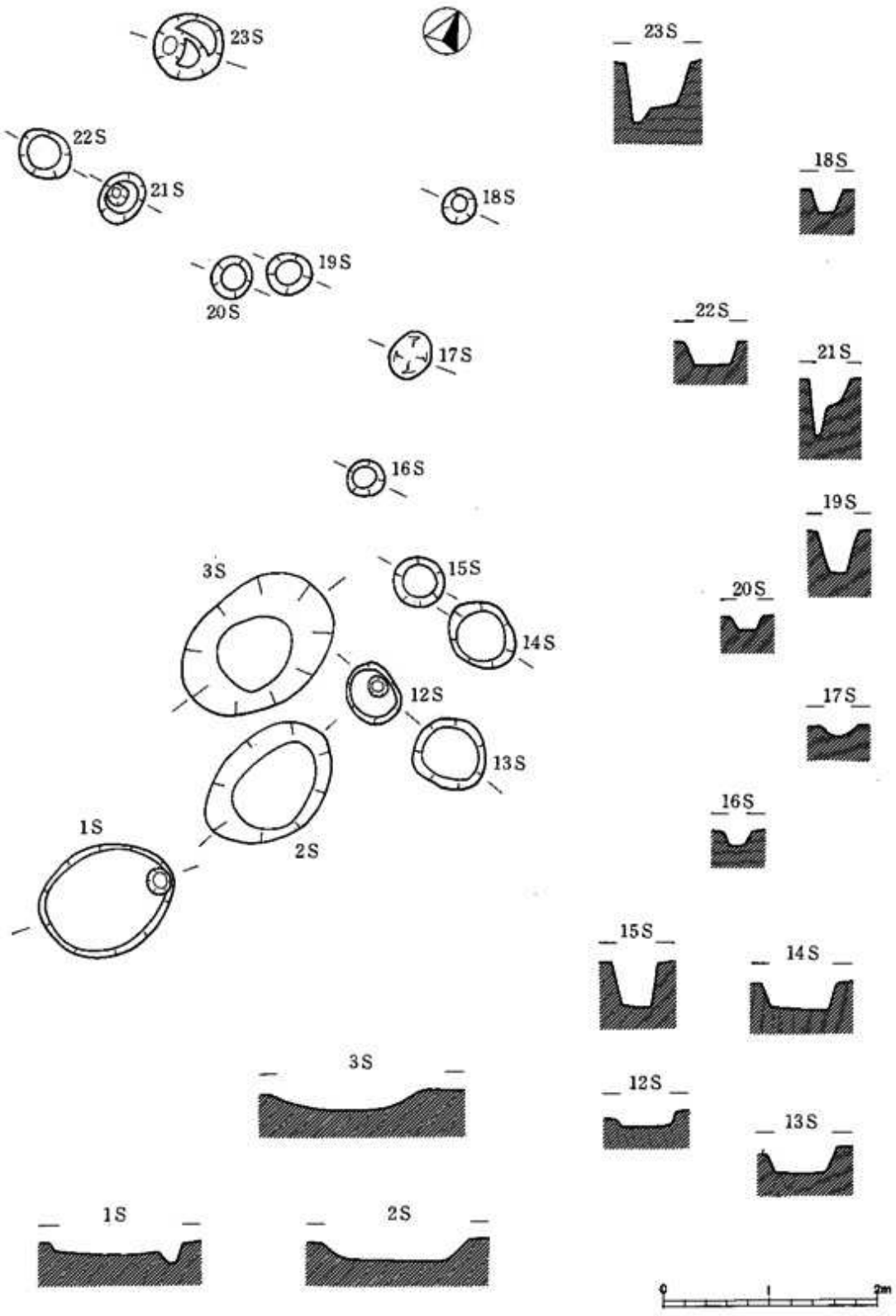
第2節　小竪穴

今回の調査で計23基の小竪穴が検出された。分布としては大きく2ヶ所に分けられ、調査区中央に位置する第1号住居址の東側から北側へ取り巻く1群と、調査区西側に散在する比較的大形の小竪穴群からなる1群である。このうち第1号住居址北側に密集する小竪穴群については、当初、個々の平面規模や深さ、あるいは並びから建物址の存在を伺わせるものであった。これには昨年度の発掘調査が行われた隣接地から検出された2基の中世建物址の存在が大きく関与していたのである。しかしながら精細な検出作業を行ったにもかかわらず規則的な配列が最後まで伺うことができず、建物址と認定するに至らなかった。

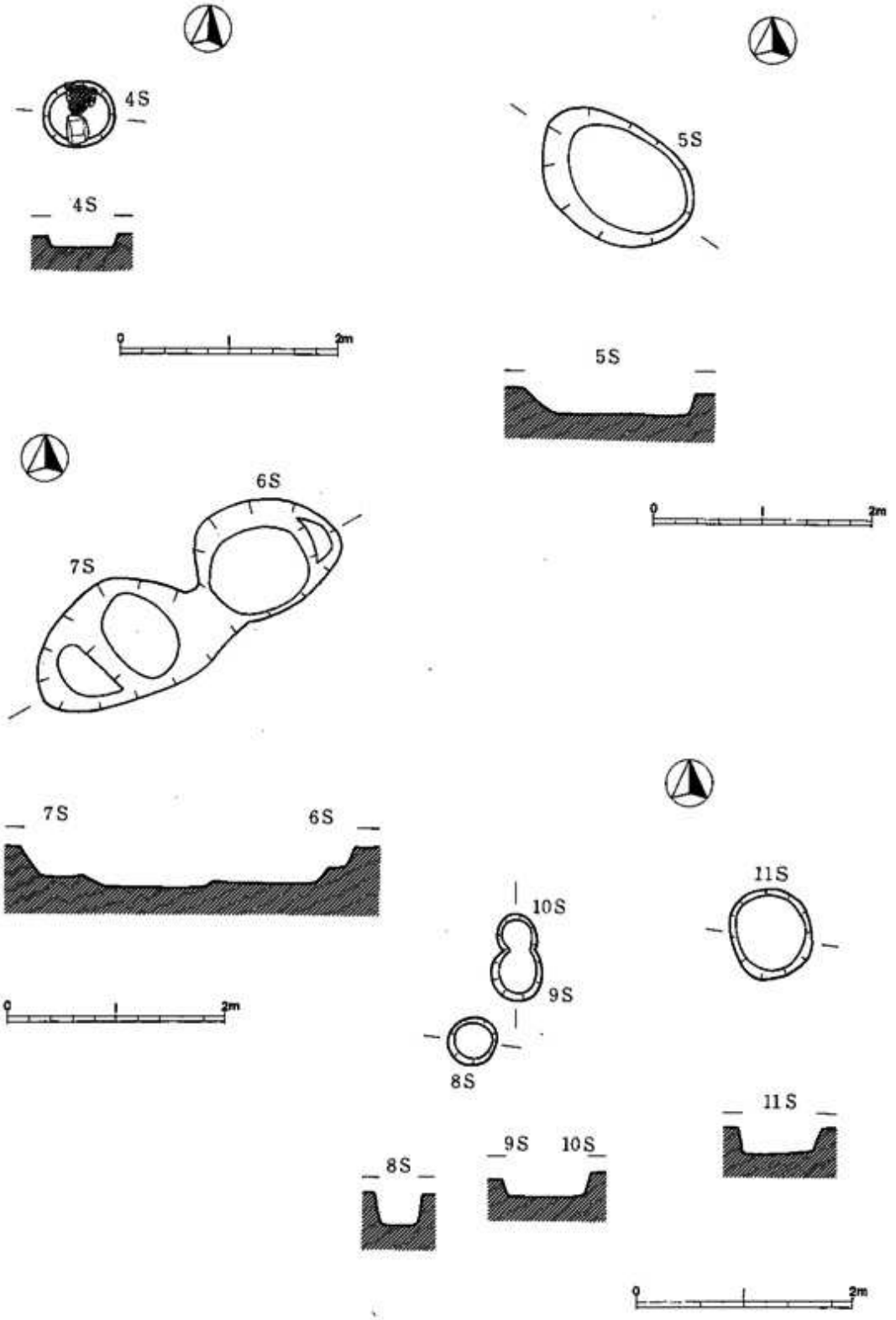
規模は長径150cm前後の大形のものと径40cm前後の小形のものに大別され、楕円形プランで断面タライ形のものを一般的とする。とりわけ特徴的な形態をもつものは少ないが、中には第15、19、23号小竪穴のように断面コップ形で深いものもある。

遺物が出土した小竪穴としては第4号小竪穴があり、長径27cmの角礫と並んで縄文時代後期の条痕文土器片が出土している。意味深い出土状況ではあったが、性格を解明するには至らなかった。

（鳥羽　嘉彦）



第7図　小竪穴群(1)



第8図　小竪穴群(2)

第２表　小竪穴一覧表

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底　面	深さ	備　　考
1	128×102	楕円	N－50°－E	タライ形	116×88	平　担（小穴１）	8	
2	137×96	〃	N－27°－E	〃	88×64	平　担	18	
3	155×110	〃	N－28°－E	〃	74×64	平　担	30	
4	65×60	〃	N－78°－E	〃	56×45	平　担	10	径27cmの大礫と縄文後期土器片
5	156×106	〃	N－52°－W	〃	124×83	平　担	21	
6	133×108	〃	N－85°－E	〃	94×76	二段平担	33	
7	172×113	〃	N－67°－E	〃	83×56	二段平担	38	
8	43×43	円形	――	〃	34×32	平　担	20	
9	46×40	楕円	N － S	〃	38×34	平　担	15	
10	38×36	〃	N－21°－W	〃	28×28	平　担	21	
11	80×74	〃	N－32°－W	〃	69×62	平　担	24	
12	58×47	〃	N－63°－W	タライ形	48×37	平　担	9	
13	69×64	〃	E － W	〃	61×47	平　担	34	
14	69×58	〃	N－74°－W	〃	45×45	平　担	25	
15	48×44	〃	E － W	コップ形	30×29	平　担	39	
16	34×33	円形	N－47°－E	〃	20×20	平　担	15	
17	46×37	楕円	N － S	擂鉢形	――	丸　底	12	
18	34×32	〃	N－4°－E	タライ形	16×14	平　担	32	
19	41×25	〃	N－50°－E	コップ形	38×22	平　担	43	
20	38×36	〃	N－26°－W	タライ形	22×22	平　担	13	
21	52×40	〃	N－23°－E	コップ形	31×27	平　担（小穴１）	23	
22	52×44	〃	N－82°－W	タライ形	31×30	平　担	22	
23	64×62	〃	N－55°－E	コップ形	16×12	三段平担	57	

第V章　遺　　物

第1節　土　　器

縄文時代

1：4号小竪穴より出土。口縁部がくの字形に屈曲内湾する深鉢である。口縁部文様帯は、2本の平行沈線に画された磨消縄文によって構成されている。胴部文様帯は綾杉状の斜状沈線が2段構成され、その下部に2本の平行沈線を施文している。胎土中に小石粒がみられ、暗褐色の色調を呈す。加曾利BⅢ式に比定されると思われる。

この土器は、4号小竪穴内より人頭大の礫と同一面上より出土した。出土状況から墓坑に伴う伏甕的性格を持つ可能性も考えられよう。

2：1と同様の器形を持つ深鉢の口縁部である。2本の平行沈線に画された磨消縄文により文様帯が構成される。加曾利BⅢ式に比定されよう。

3：深鉢の胴部と思われる。焼成は良好で、色調は暗茶褐色。縄文後期に属する土器と思われるが詳細については判然としない。

弥生時代

1：無頸壺の口縁から胴部である。箆によるものと思われる条痕が綾杉状に施文されている。内面には明瞭な輪積み痕がみられ、指頭による圧痕が観察される。色調は明黄灰色を呈し、胎土中には石英が含まれる東海系の胎土である。東海、あるいは美濃方面からの搬入品と思われる。岩滑式に比定されると思われる。

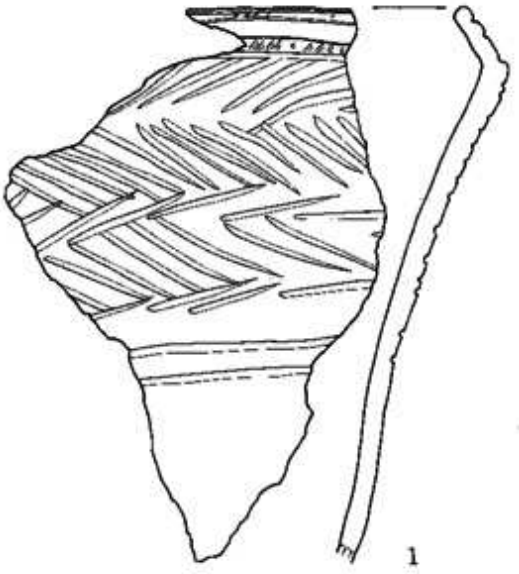
2：1号住居址の埋甕炉に使用されていた無文の甕である。胴下半部以下を欠く。内外面ともに箆状工具により整形されているが粗雑である。比較的、厚手であり胎土には金雲母を多量に含む。口径14.6cm。箱清水式の初段階に相当するものと思われ、岡谷市橋原遺跡に、この類例がみられる。

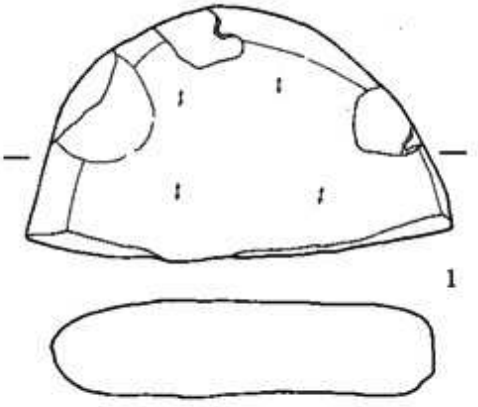
3～6：2号住居址出土。1号住居址と同時期と思われる。

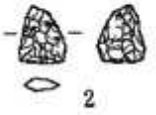
3：口頸部のみを残す甕である。口縁部にはハケによる整形がみられる。頸部に等間隔に止められた簾状文がみられる。

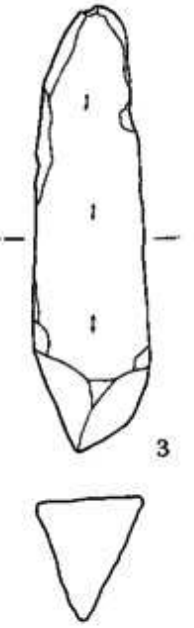
4：小型甕。口径11cm、底径4.2cm、器高8.5cmを測る。内面は横方向の箆ナデがみられ、底部外面に箆削りがみられる。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

5：小型甕。外面は箆磨きがなされ、胴部内面に指頭圧痕がみられる。頸部はくの字形に屈曲する。



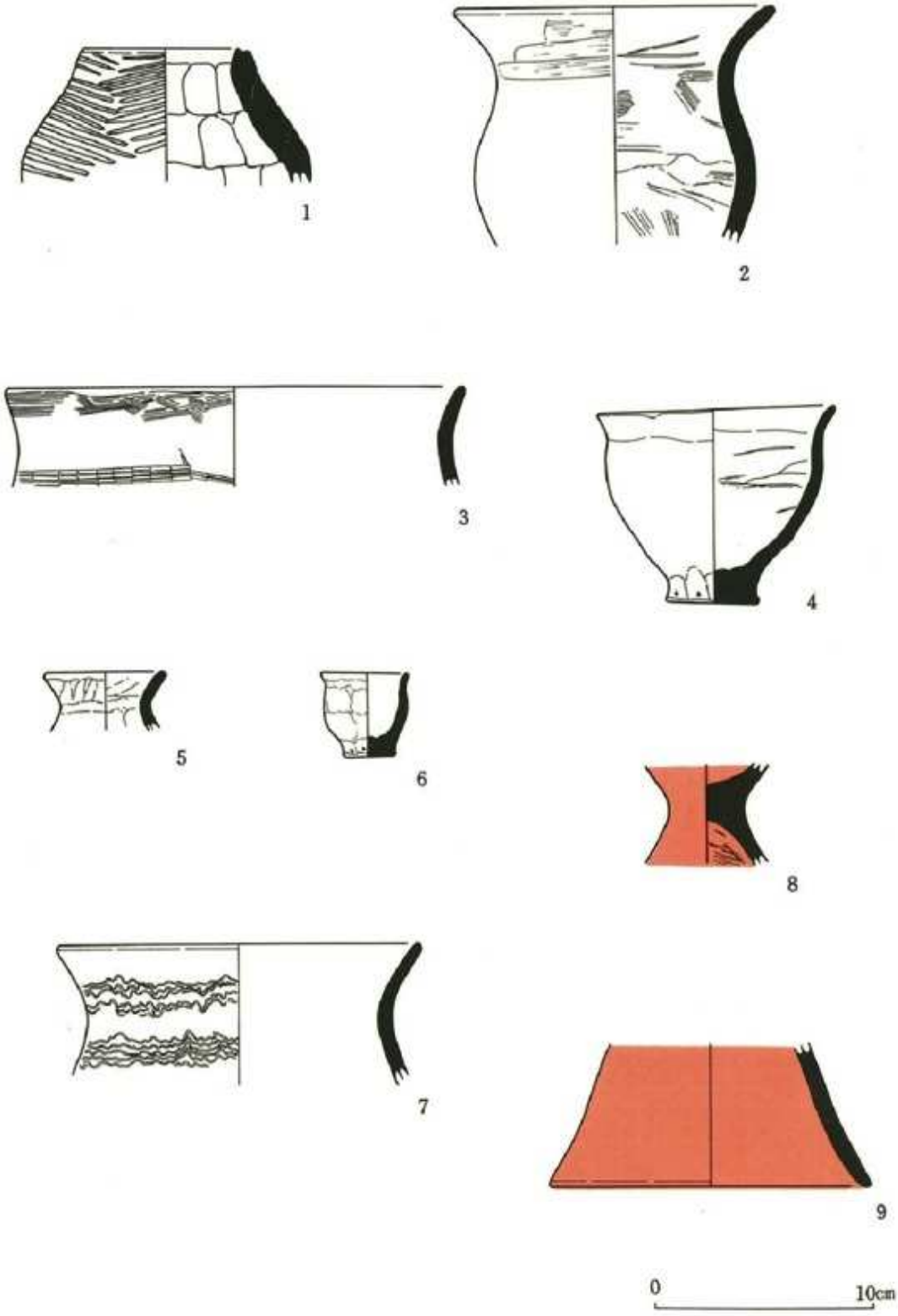






0 10cm

第9図　縄文時代出土遺物



第10図　弥生時代出土遺物

6：甕を模倣したミニチュア土器である。口径4㎝、底径2.3㎝、器高4㎝。底部に篦削りがみられる。

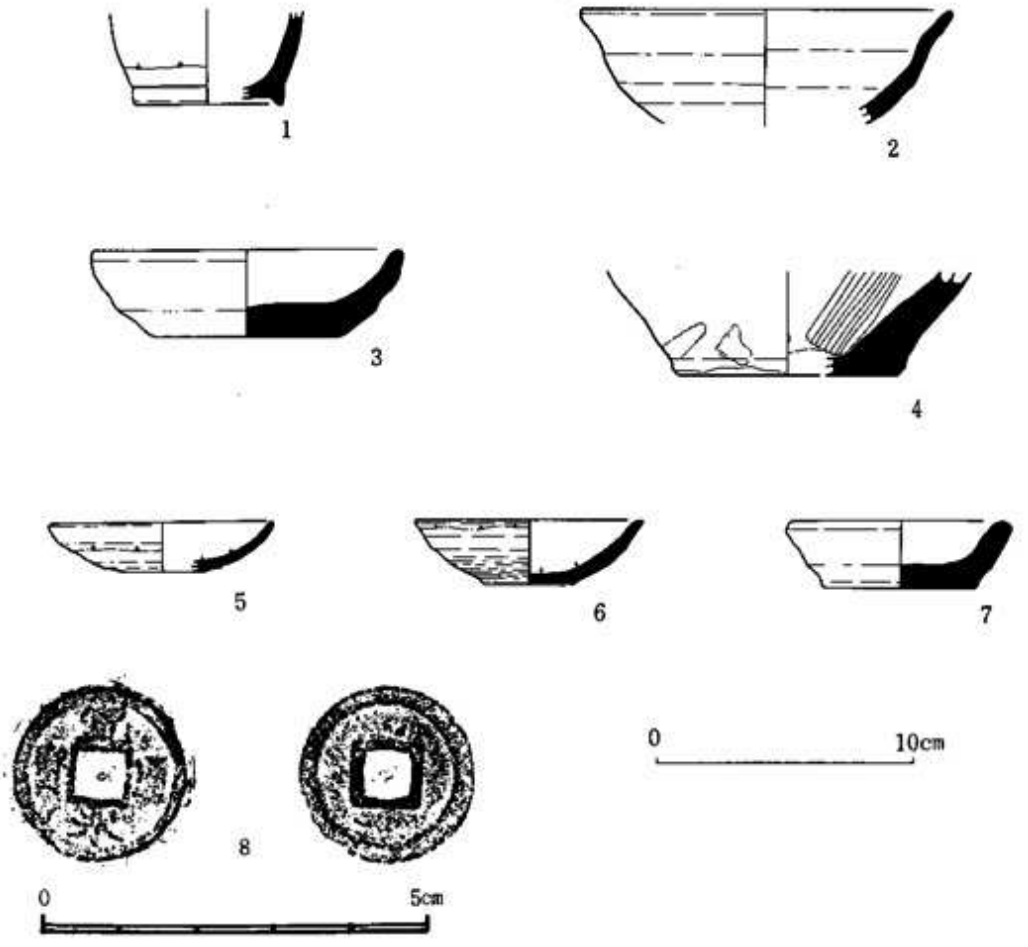
7：3号住居址の埋甕炉に使用されていた甕。胴部以下を欠く。やや乱雑な波状文が帯状に施文されている。口径16.5㎝を測る。1号住居址と同時期であろう。

8・9：高坏。内外面ともに赤包塗彩がなされている。遺構外出土品であるが、時期的には、前記のものと大差はないであろう。

平安、中期、近世

平安時代　本遺跡において平安時代の遺構の発見はなく、昨年度の調査結果とあわせても、遺物の量はごく少ない。今回の調査において、土師器坏片、須恵器甕片、灰釉陶器片が若干出土したが図示し得るものは、1の灰釉陶器瓶片1点のみである。底部で、低い付け高台を有する。内外面とも丁寧なロクロ整形がなされ、胎土、焼成ともに良好で色調は灰白色を呈する。

中・近世　今回の調査においては遺構の発見はなかったが、遺物は、時期的な拡がりも持って



第11図　中・近世遺物

出土した。器種では、坏、皿、椀に属するものがほとんどであり、擂鉢の破片が2点出土している。2は山茶椀である。断面形はゆるいS字状をなし、比較的厚手のものである。ロクロ成形によるもので、胎土、焼成は良好である。内外面に黒褐色の附着物が認められる。12世紀～13世紀初頭のものであろう。3はかわらけである。ロクロ成形によるものであるが粗雑なつくりである。胎土には少量の砂粒がみられ、焼成はあまり良くない。口径11cm、底径5.2cm、器高3.3cmを測る。4は擂鉢の底部である。ロクロ成形によるものであり、回転糸切り痕を有す。内面は、かなり磨耗しており、使用のあとがうかがえる。また色調は内外面ともに紫色を呈し、16世紀、大窯期のものであろう。5は小皿あるいは燈明皿であろう。底部に回転糸切り痕を残す。釉のかかっている部分は鬼板により茶褐色を呈す。18世紀以降のものではあるが詳細は判然としない。またこれと同様に鬼板による擂鉢の口縁部の細片が出土している。この他18世紀のものと思われる伊万里焼の椀の破片が2片出土している。6は燈明皿である。ロクロ成形によるもので、底部は回転ヘラケズリによりつくり出された僅かな稜が認められる。内面には灰釉がかけられ、若干赤味をおびており、美しい。19世紀のものであろう。また、同時期の所産と思われる燈明皿の細片が2点、染付の椀の破片が1点出土している。染付の文様は、弧状の縁による区画の中にダミ筆によって点を3点ずつ数箇所に施している。色調は乳白色を呈す。7は江戸時代のものではあるが、まだ正確な位置づけがなされていない。かわらけの系譜をひくものであろう。器種としては坏、あるいは燈明皿と思われる。口径8.6cm、底径6cm、器高2.5cmを測る。かなり厚手であり、胎土には砂粒を含む。底部に回転糸切り痕が認められる。

8は、寛永通宝で最初の鋳造が1626年である。永の字が「永」となっているのが多いのに対し、これは「永」となっている。また裏面の上方に、やや右寄りではあるが背星がみられる。これらの特徴から寛永通宝の中でも古手のものであるといえよう。　　（龍野　守）

第2節　石　　器

本遺跡より出土した石器は1～3の3点のみである。1は2号住居址の床面直上よりの出土である。片面に磨痕が認められ、扁平石皿かとも思われる。2は三角形を呈する石鏃である。先端部が若干欠損している。3は砥石であるが、使用面は1面のみである。この使用面にはかなり顕著に磨痕が観察される。　　（龍野　守）

第3表　石器観察表

番号	発掘区	種　別	材　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
1	2H	台　石	安山岩	9.8	16.5	3.5	923.0	
2	B－5	石　鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.6	2.8	三角鏃
3	D－4	砥　石	硬砂岩	17.3	4.5	4.6	425.0	

第Ⅵ章　まとめ

砂田遺跡の発掘調査は、昨年度の塩尻東地区県営ほ場整備事業に伴った発掘調査につづき２回目の調査である。そのため本遺跡の性格を究明するためには両年度の調査結果を総合して考察する必要がある。以下、２年次にわたった調査の成果から時代順に遺跡の変遷を追ってみたい。

砂田遺跡の最初の痕跡は、縄文時代中期藤内期にさかのぼる。出土遺物は多くなく、土器片がわずか得られたにすぎないことから考えて、単期間の居住ないし往来であったと思われる。次の縄文後期加曾利Ｂ期には、大形土器破片をその上部から出土した小竪穴が検出されている。墓壙的な性格を有するものとも考えられている。この地域では後期加曾利Ｂ式の遺物は少なく、貴重なものといえる。

米づくりが始まった弥生時代に入ると田川に面したこの遺跡一帯は重要な居住、生産地域となる。中期前半に該当する土器、石鏃が出土していることから、すでにその初期より生活の痕跡が認められる。しかし、この地が最も重要度を増すのは後期に入ってからで、この時期にはある程度の規模をもつ集落が形成されていたことが判明している。今回の調査では４軒の住居が検出されたが、集落は更に未調査地区の現塩尻工業敷地部分にまで伸びていた可能性が強い。田川流域では最近の発掘調査の進展によって、多くの弥生時代集落が発見されている。砂田から１kmほど上流には40軒もの住居が検出された田川端の大集落址があり、１km下流には中島、そして田川の支流、鋳物師屋川に面した向陽台、中挟でも集落の確認がなされている。また、本遺跡に程近い大門柴宮からは三遠式銅鐸が出土している。これらの諸集落の成立基盤は、田川およびその支流が形成した低湿地の水田地帯を背景としたものと思われる。

弥生時代後期後半のこの地域一帯の集落、生産、祭祀などの実態解明の資料は次第に整いつつある。今後の総合的考察が期待される。

弥生時代以後、時代的空白をはさんで平安時代になり、灰釉陶器が出土している。以来、連綿と近世まで各時代にわたった資料が残されているが、掘建柱建物址が検出されている中世がその中心となろう。残念ながら各期の出土遺物が僅少で、その性格に明瞭さを欠いている。地名、道路、地勢など多面的な検討を加える必要があろう。

砂田遺跡は、縄文時代中期から近世まで長年月にわたって人々の生活の痕跡が残された遺跡である。この地が何故このように長期にわたって人々の活動の対象地域たり得たのかという問題は、今後に残された大きな課題である。

（小林　康男）

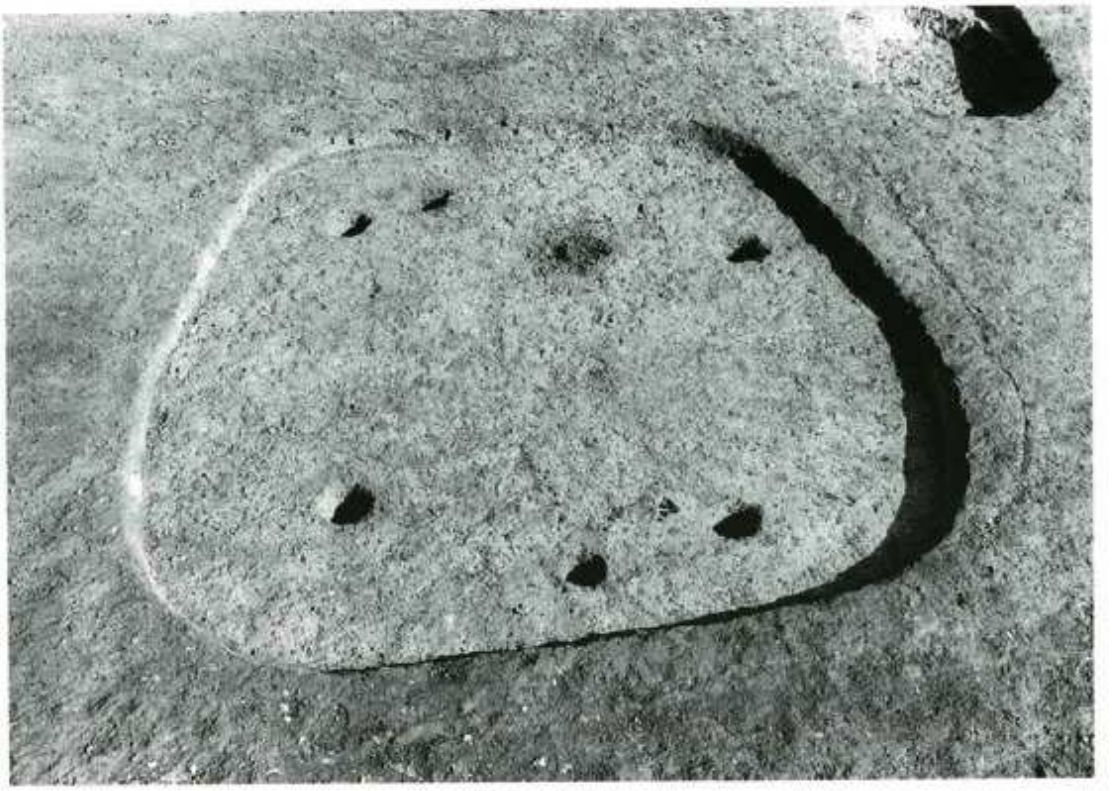
全景（発掘前）

表 土 除 去

図版2

遺構検出作業

住居址掘下げ

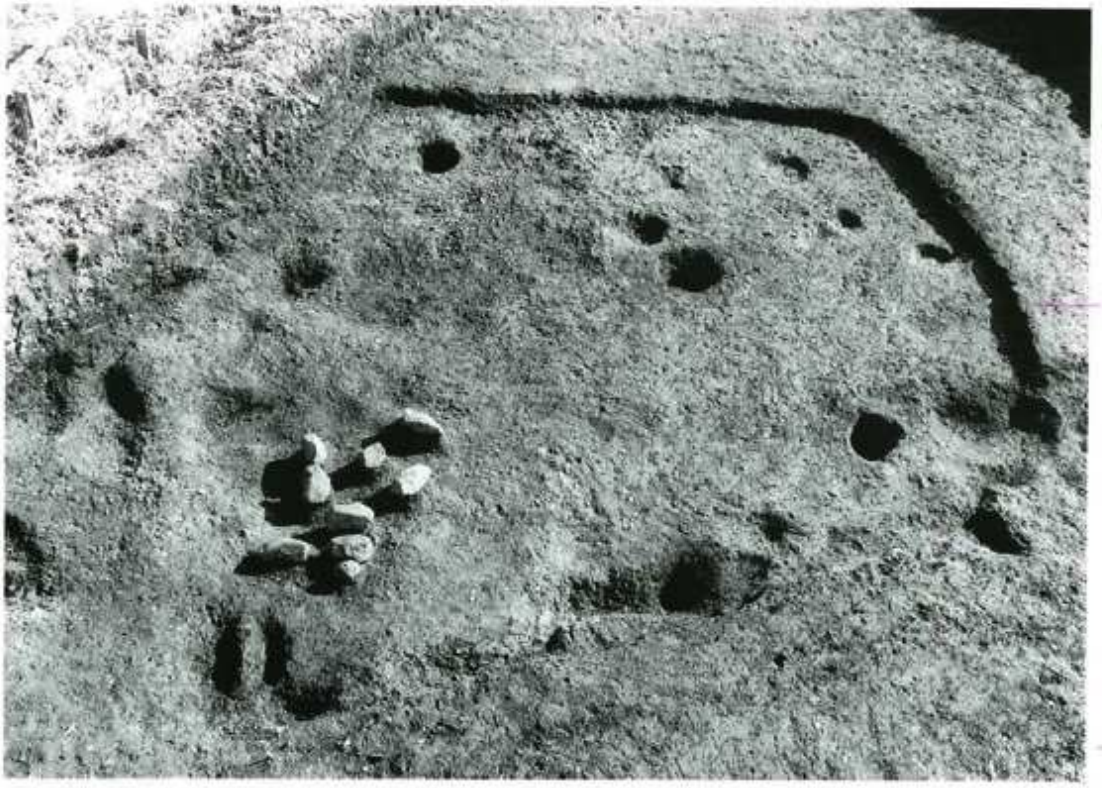


第1号住居址

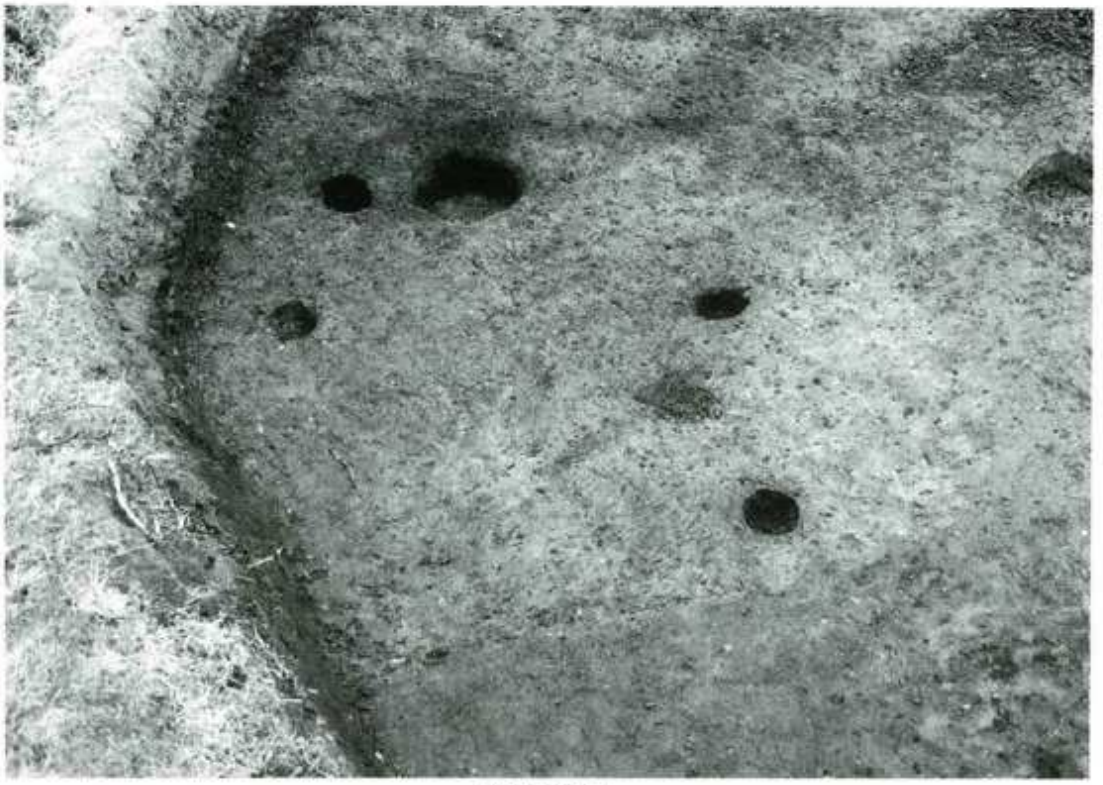
同上　埋甕炉

図版4

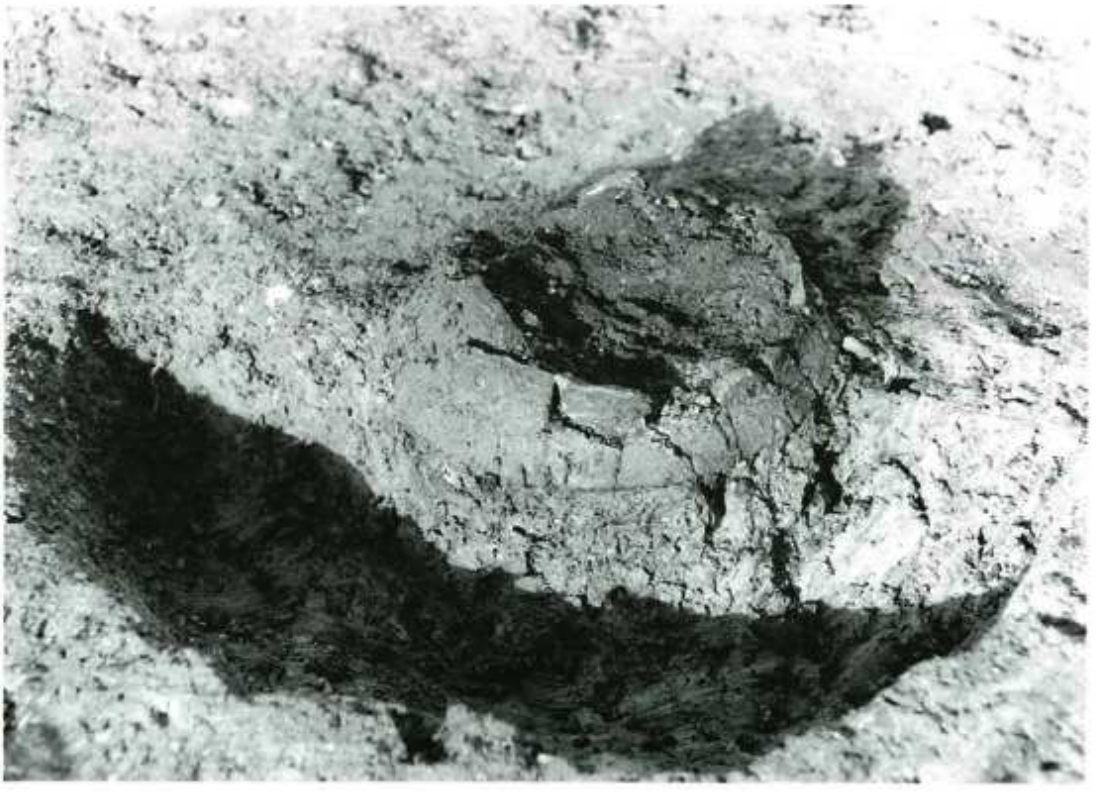
第2号住居址掘下げ



第2号住居址

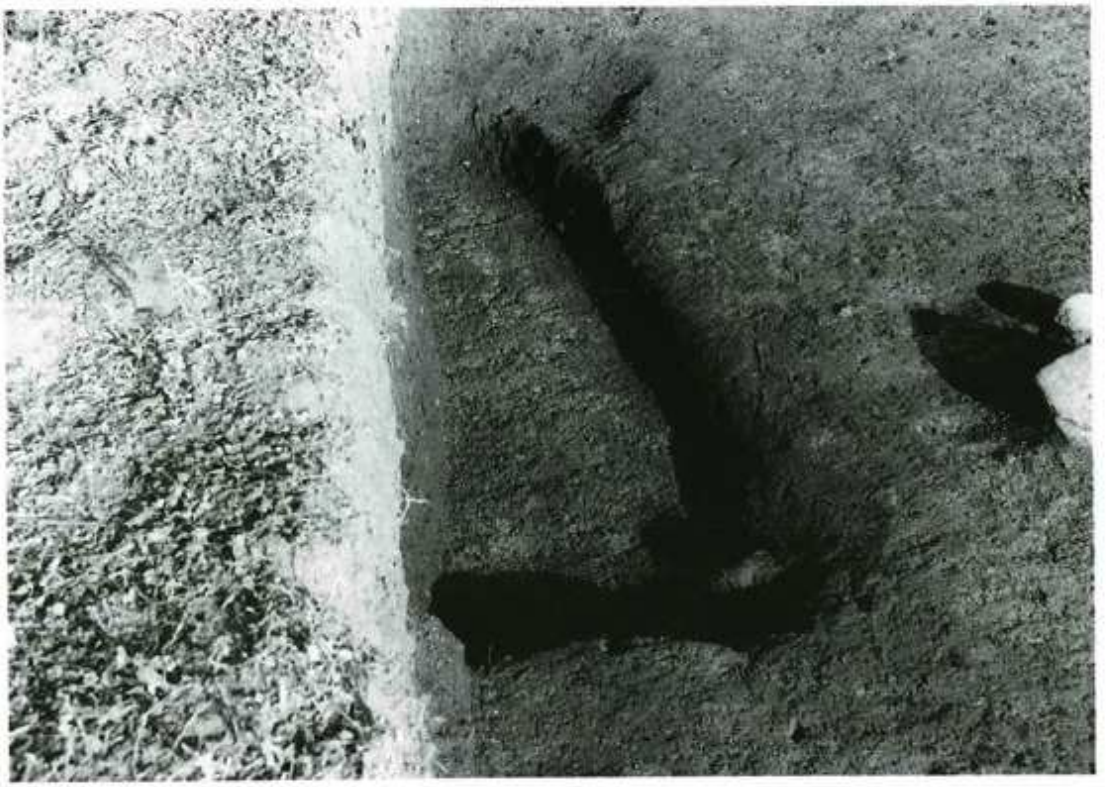


第3号住居址



同上　埋甕炉

図版6



第4号住居址

セクション図測図

小 竪 穴 群

第4号小竪穴

図版8

調査区全景（東側）

出土遺物

砂　田　遺　跡

—塩尻市一本木土地区画整理事業発掘調査報告書—

昭和62年３月20日　印刷

昭和62年３月22日　発行

発行　塩尻市教育委員会